

# — PROGRAM —

ハイドン： 弦楽四重奏曲第 75 番ト長調 Op.76-1

モーツァルト： 弦楽四重奏曲第 18 番イ長調 K.464

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第 5 番変ホ長調 Op.44-3

弦楽四重奏団ヴィルタス・クワルテットによる、モーツァルトの《ハイドン・セット》全 6 曲と、メンデルスゾーンの弦楽四重奏曲全 6 曲を組み合わせたシリーズは、コロナ禍のために幾度もの延期を余儀なくされましたが、今回は第 4 回となります。そしてもう一人の“天才”は、今回も 6 月の第 3 回に引き続き、弦楽四重奏をクラシック音楽の本流に位置付け、モーツァルトが音楽上の父とも慕ったハイドン。彼はモーツァルト亡き後もその歩みを止めることなく、自ら築き上げた堅固な構成に磨きをかけ、弟子ベートーヴェンのみならず、ロマン派音楽へとその遺伝子を遺すこととなります。

## ハイドン：弦楽四重奏曲第 75 番ト長調 Op.76-1

18 世紀後半のヨーロッパにおいて、当代随一の巨匠と謳われたハイドンは、1781 年にウィーンでモーツァルトと初めて出会います。このとき、24 歳も年齢が離れていたにもかかわらず二人は意気投合。お互いの音楽性や力量を認め合う親友となり、この関係はモーツァルトが没する 1791 年まで変わることはありませんでした。

1790 年、ハイドンは永年仕えた大貴族エステルハーゼ侯爵家から離れ、翌 91 年から 92 年と、94 年から 95 年の 2 度にわたって渡英し、ロンドンで活動しています。彼はイギリスで大成功し、市民権も得て一時は移住することも考えましたが、結局 95 年にウィーンに戻りました。彼の 83 曲（偽作の疑いのあるものを省くと 68 曲）にのぼる「弦楽四重奏」の集大成となる〈エルデー四重奏曲 op.76（全 6 曲）〉は、ロンドンから帰国した後に手がけられました。この曲集の第 1 曲目である本作は、全 6 曲の中でも特に愉悦にあふれた作品で、弦楽四重奏の可能性を追究した作品といえるでしょう。第 1 楽章冒頭、3 つの和音に続いて提示される第一主題は、各楽器に次々と受け継がれ、一瞬フーガのように思えますが、実はフーガではなく、これもハイドンのユーモアのひとつといえます。

## モーツァルト：弦楽四重奏曲第 18 番イ長調 K.464

モーツァルトがハイドンと出会った頃、ちょうどハイドンは 9 年ぶりに弦楽四重奏を手掛けていました。〈ロシア四重奏 op.33〉と呼ばれたこの全 6 曲は、モーツァルトに大きな刺激と靈感を与え、彼は早速、“ハイドンに捧げるための弦楽四重奏曲”を書き始めます。全 6 曲を完成するのに足掛け 4 年を要し、全曲完成の翌日にはハイドンを自宅へと招いて、試奏会を催しています。

《ハイドン・セット第 5 番》に当たる〈弦楽四重奏曲第 18 番〉は、6 曲の中で最大規模を誇り、多くの研究者がモーツァルトの弦楽四重奏曲における最高傑作に挙げる作品です。またベートーヴェンが最初の〈弦楽四重奏曲 op.16〉全 6 曲を作曲する際に常にこの曲のスコアを持ち歩き、研究のために筆写した最終楽章の手稿楽譜が遺されています。これは、両端楽章のソナタ形式において、ともに第一主題が圧倒的な存在感を持ち、楽章全体を支配している構成に惹きつけられたから、と考えられています。また楽章間での主題の関連が明確に意識されること、精緻な対位法で第 2 楽章メニューエツトが書き上げられていること、さらに第 3 楽章には雄大な変奏曲が置かれていることなど、ベートーヴェンへとつながる斬新な内容でありながら、モーツァルト特有の優美なニュアンスに彩られた作品となっています。

## メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第 5 番変ホ長調 Op.44-3

ハイドンがウィーンで亡くなった 1809 年、ライプツィヒで生まれたのがメンデルスゾーンです。幼少期から神童と称され、18 歳となる 1827 年に〈第 2 番 イ短調〉、20 歳で〈第 1 番 変ホ長調〉を作曲しています。その後彼は重要なポストに就いてドイツ楽壇およびロマン派音楽の発展のために多忙な生活を送り、弦楽四重奏曲から遠ざかっていました。

1837 年、8 年ぶりに〈第 4 番 変ホ短調〉に着手し、それを皮切りに 3 曲の《弦楽四重奏曲 作品 44》が完成されました。この〈第 5 番〉は翌 38 年 2 月に完成され、4 月に初演されました。長調の作品にしては晦渋な響きを湛えた第 1 楽章は、鋭さを持つ 16 分音符と、それに続く 4 分音符の緩やかな音階からなる第一主題が中心となり、ト短調で対比される第二主題でも、第一ヴァイオリンに 16 分音符の音型が現れるなど、楽章全体をまとめています。続く第 2 楽章は、焦燥感に満ちたスケルツォ。中間部にフーガが組み込まれています。そして、メンデルスゾーンらしい無言歌的な緩徐楽章の第 3 楽章を経て、快活でエネルギーに満ちた終楽章を迎えます。

いわきアリオス 音楽学芸員 足立優司

2021 年 12 月 4 日（土）

神奈川県立相模湖交流センター ラックスマン ホール

第 4 回 ヴィルタス・クワルテット 2 人の天才 モーツァルトとメンデルスゾーン